

令和元年度 第29回全国女性建築士連絡協議会（東京）分科会概要一覧

分科会名称	コメンテーター	概要
A分科会 「被災地支援の取組み」	木村 洋子 (福岡県建築士会)	<p>熊本の震災から4年目を迎えました。</p> <p>応急危険度判定の支援をきっかけに、熊本市北区の椿ヶ丘地区での支援交流が始まりました。3年間の地域の人たちとのふれあいは実に大きな「学びの場」でした。</p> <p>突然被災者という立場に突き落とされた人たちが味わう辛さを被災地の人たちだけの辛さにしてはならないと思いき知らされる日々でした。</p> <p>被災地は、この後、どのように復興への移り変わりに対応していくだろうか。平時になってなお被災時の助け合いや機動力が活かされて行くだろうかと自問自答して来ました。</p> <p>全国各地で地域支援を続けている仲間たちの共通した課題にどのように取り組んでいくか、それぞれの立場の意見交換をしたいと思います。</p>
B分科会 「心地よい暖かさの住まいを求めて」	星ひとみ (宮城県建築士会)	<p>2020年から「住宅の断熱性能の最低基準の義務化」が予定されていましたが、白紙化されることになりました。これまで精力的に取り組んできた実務者の方達にとっては大変衝撃的であったと思います。しかし、環境と共生する住宅を目指すことへの取り組みが無駄になる訳ではありません。古民家や新築住宅へのパッシブソーラーの仕掛けの報告とパッシブソーラー（既存・新築）、床暖房（新築）、エアパス、（新築）、在来木造住宅（既存の断熱改修）の温湿度と壁表面温度とあわせて測定建物の「暖かさの質について」の報告、をもとに断熱と気密はどの程度必要なのかなどについて 皆さまと意見交換をしたいと思います。</p>
C分科会 「歴史的建造物と建物再生」	磯田 節子 (熊本県建築士会)	<p>平成28年（2016年）4月に起こった熊本地震により、被害を受けた宇城市小川町の江戸から明治時代の町家からなる商店街にて、被災調査にかかわった町家を中心にした復興の中で、地域の歴史的建物に係わりながら、建物再生から商店街のこれからの再生につながる活動をされています。その実践を踏まえた活動や、問題点等を合わせて報告をしていただき、建築士や建築士会が歴史的建造物等の建物再生、地域再生にどのように関わっていけるかなどの情報交換や意見交換を行い、今後の取り組みについて考えて行きたいと思っています。</p>

<p>D分科会 「会員拡大へ向けた 取り組み」</p>	<p>高源 真由美 (徳島県建築士会)</p>	<p>建築士は年々高齢化と減少が進んでおり、それに伴い建築士会の会員も人数が減少しています。そのため、各都道府県の建築士会では会員拡大へ向けた様々な取り組みを行っていますが、なかなか増加につながっている士会は少ない状況です。</p> <p>徳島県建築士会では、建築士会を会員のための会とするとともに、「2020・2020計画」と題して2020年に会員を2020人にするという計画を立ててチャレンジを始めています。このような取り組みの紹介とともに、各士会の取り組みや課題を共有しながら、建築士会の今後のあるべき姿について話し合いたいと思います。</p>
<p>E分科会 「木造塾」</p>	<p>川口 洋子 (香川県建築士会)</p>	<p>多くの建築士が携わる機会が多い木造建築。E分科会では、木造建築をいろいろな側面から学ぶ事ができ、建築士に限らず建築に関わる他職種の人達も交流しながら学べる機会となっている「木造塾」の多様な取り組みを報告いただきます。</p> <p>かがわ木造塾では、木造に携わる建築技術者向けの講座を開催し、毎年延べ250名程度の設計者が半数、住宅メーカー工務店、職人、建築系の先生、その他の業種等様々な受講生います。</p> <p>講座内容としては、デザイン計画・構造設計・施工・外構計画・省エネ環境など講師の先生をお呼びしての講習会。現地へ出かけて行くフィールドワーク講座。県外へ出かけて、1泊視察ツアー。県内で活躍されている建築に関する仕事をされている方の話を聞く。等を実施しています。</p> <p>また報告後に、地方や少人数でも持続可能な勉強会の始め方・進め方等について参加の皆さんと意見交換を行いたいと思います。</p>
<p>F分科会 「子どもと住環境」</p>	<p>辻 明子 (福井県建築士会) 田上 順子 (和歌山県建築士会)</p>	<p>次世代を担う子供達に木を使用した住教育の活動を続けている福井県と和歌山県の活動報告をして頂きます。</p> <p>福井県は5年前に住教育活動報告を行い様々な問題提起をしていました。その活動報告を参考に新たに活動を始めた和歌山県の活動、それぞれの取り組みの報告と、今後建築士や建築士会がどのように関わっていけるかなど、参加者の皆様と意見交換を行いこれからの子供達との関わりを含め住教育を考えていきたいと思います。</p>

<p>G分科会 「高齢社会と住まい」</p>	<p>高野 栄子 伊藤 麻子 (岐阜県建築士会)</p>	<p>内閣府による高齢社会白書(平成 30 年版)によると、日本の総人口は平成 29 年 10 月 1 日現在、1 億 2,671 万人となっており、その内 65 歳以上人口は 3,515 万人。総人口に占める割合(高齢化率)は 27.7%です。2025 年には 3,677 万人に達し、高齢化率は 30%を超えると予想されています。平成 12 年に介護保険制度における住宅改修が開始されてから、まもなく 20 年が経とうとしていますが、「高齢者」と「住まい」に関する議論が継続して盛んに行われているかという、そうとは言い難い状況ではないでしょうか。</p> <p>2017 年に岐阜県で立ち上がった「福祉まちづくり部会」では、介護保険制度や地域包括ケアシステムの中で建築士に何ができるかを考え「福まち建築士相談員派遣制度」を開始しました。多職種連携研修や地域ケア会議などにも参加するなど交流の場を広げているそうです。その活動の報告から、高齢者を取り巻く住環境において「今」私たち建築士に何ができるかについて考えたいと思います。</p>
<p>H分科会 「クリークの再生とまちづくり」</p>	<p>満原 早苗 (佐賀県建築士会)</p>	<p>佐賀県には戦争時代も空襲などの大きな被害を受けず、江戸時代に整備されたクリーク(水路)が今も大きく形を変えずに残っている。しかし、時代とともに変化する暮らしやまちなみとともにその存在が薄れつつあった。歴史的にも土木遺産としても非常に価値のあるクリークを再認識し、水とともに生きる暮らしの再生をめざし様々な活動をしている。船着き場の整備、クリークをカヤックや和船で体験するイベントやマルシェの開催、市民で行われる清掃活動への参加、一方で水質の確保や護岸づくりの為に行政と話し合いもしている。2018 年 3 月～2019 年 1 月まで開催された、佐賀県主催の【肥前さが幕末維新博覧会】のサテライト会場「オランダハウス」沿いのクリークでは、オランダと佐賀の水辺の共通点や水辺のデザインなどをオランダに学びながら、10 か月間の運航を行いました。</p>